

昭和52年12月5日第1巻第1号刊行 ISSN0386-2283
平成17年9月1日発行 第29巻第9号通巻第336号

2005

9

September

みん
ぱく

月刊◎

国立民族学博物館編集

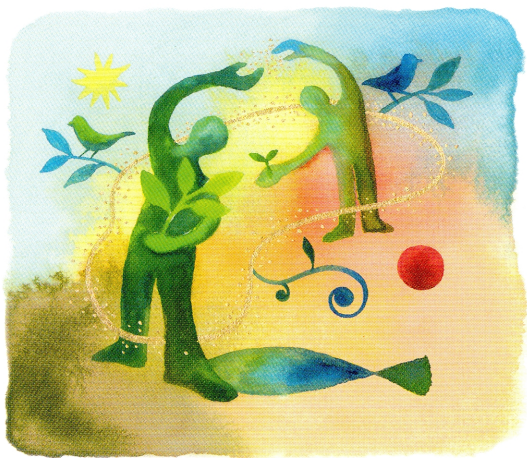
特集

暮らしのサリ

真の文化外交をめざすこと ● マリクリスティーン

私 が生まれたのは、母が日本人、父がイタリヤ系アメリカ人という家庭。家の中には三つの文化が混在していました。日本で生まれた私は、その後キリスト教のドイツとアメリカ、回教のイラン、そしてまた日本とは形の違う仏教を信仰するタイという、ベースが異なる国々を移り住み、さまざまな経験をしてきました。たとえば回教国でのこと。ラマダンという断食苦行の時期になると、回教徒の友人は昼食をとることができません。私はそれをかわいそうに思っていたのですが、彼女たちは言うのです。「私たちはかわいそうではない。これはとても大事な行事で、むしろ喜んで実行しているのだ」と。このような経験を通して、私は、く自然に多様性を受け入れるようになったのです。

さて現在この世界を見渡すと、政治、宗教、経済上の対立や戦争が勃発し、環境問題が深刻になっています。私たちは、どうしたら平和で住みやすい世界を創つていけるのでしょうか。私たちの心の内にある、問題解決を妨げているものは、何なのでしょう。それは、「自分の国が一番」という意識かも知れません。またあるいは、「知っているつもり」でおこなわれる表面的な交流の姿勢ともいえます。しかし私たちは実際、隣人と交流する日々の中で、考え方や価値観の違いを感じとり、必要があれば、それらの違いや好き嫌いを越え、互いを理解するために歩み寄ります。外交における妥協点の拡大も原点は同じなのです。一九七〇年に開催された先の大阪万博も、海外文化と交流できる大きな機会でした。しかし珍しさが先行し、真の国際交流にまでは至りませんでした。それから三五年を経て開催された二〇〇五年日本国際博覧会「愛・地球博」で、私は広報プロデューサーを務めています。今回参加した二二〇カ国のパビリオンは、「グローバル・ループ」とよばれる全長二・六キロの空中回廊でつながれています。各国は自国文化のエキスを各パビリオンで紹介し、一方、私たちはその一つひとつに対して、珍しさではなく尊敬の目



イラストレーション：栗岡奈美恵

で接することができるようになりました。まさに今こそ、真の国際交流・文化外交のスタートといえます。今日、この日本に住んでいる私たちは、大事なターニング・ポイントに立っている。そんな気がしてならないのです。

マリ クリスティーン/異文化コミュニケーションとして、都市計画、教育問題、人権問題等について、さまざまな活動を展開。AWC(アジアの女性と子どもネットワーク)代表。国連人間居住計画親善大使。

目次

CONTENTS

- エッセイ 世界へ世界から
- 01 真の文化外交をめざして
マリ クリスティーン
- 02 特集 暮らしのサリー
- サリーがいのち
杉本良男
- サリーの贈り物
三尾 稔
- 神さまの衣装道楽
杉本星子
- サリーの好みとカースト
松尾瑞穂
- 貧困のなかのサリー
菅野美佐子
- サリーで花嫁さんごっこ
南出和余
- 憧れの女優ファッション
村田晶子
- 表紙モノ語り
- 11 トップ・デザイナーのサリー
杉本良男
- 12 みんぱくインフォメーション
友の会ミュージアム・ショップからのご案内
- 14 万国津々浦々
土族民俗村の出現
庄司博史
- 時論・新論・理想論
- 15 標本資料を守る人たち
日高真吾
- 手習い塾
- 16 デーヴァナーガリー文字で
日本語を書く②
町田和彦
- 地球を集める
- 18 チュルカナスの焼きもの
藤井龍彦
- 生きもの博物誌
- 20 噛む楽しみは広がる
石田慎一郎
- 見ごろ・食べごろ人類学
- 22 羊肉でやせられるの?
森本利恵
- 24 特別展「インド サリーの世界」

次号予告・編集後記

暮らしのサリール

サリールを身につけたインド女性は美しく、優雅で魅力的である。それはあたかも女神のイメージを連想させる。サリール。それは長い一枚の布であり、仕立てられた服ではない。しかしこの一枚の布が織りなす世界は実に奥が深い。インドは一〇億を超える人口をもつ大国であり、人びとの生活スタイルも多様である。そのなかで、サリールはインドを代表する衣装としてインド全体に広まっている。またそれだけに、その素材も着方も、地域や階層などによって千差万別である。また、サリールは国境を越えて、パングラデシュ、スリランカ、ネパール、さらには欧米などの在外インド人社会にも広がっている。本特集では、九月八日から開催される特別展「インド サリールの世界」にちなみ、とくに暮らしのなかに生きているサリールについて、さまざまな角度からとらえてみたい。



華やかなサリールとシャルワール・カミーズに身を包む女性たち(コルカタ市)



サリールがいのち

杉本良男

千きもとよしお 先端人類科学研究部

インドの女性とうちとけようとするならば、ともかくサリールの話をすればよい。わたしサリールには目がないのよ、とひとごとを乗りだして行く人がほとんどだ。あまり関係がなさそうな顔をしているのも、じつは衣装もちだつたりする。ともかくインド女性のサリールへの関心は強い。そして、サリールは自分がインド女性である、という意識をもたせる衣装でもある。ただ、インドもクロイバル化と経済自由化の波をうけてライフスタイルが大きく変わり、サリール以外のファッションも目につくようになってきている。

サリール(正確にはサリールに近い)は基本的に成人の女性が着るものである。少し前までは、未成年のための簡易型のハーフ・サリールが学校の制服にもなっていたこともある。しかし、ここ二〇年ほどのあいだに、若い女性のファッションはパキスタンで広く着られている、シャルワール・カミーズ(いわゆるパジャマ・ビードレス)にこたえられた。シャルワール・カミーズは、丈の長い上衣(カミーズ)とゆつたりしたパンツ(シャルワール)を合わせたもので、結婚前の女性に広く普及し、大学のおしゃれな学生の制服のようになった。その肩がそのままち上がつて

上の世代にも広まったのである。さらに外国の影響でジーンズも人気があり、カミーズの下にジーンズをあわせるファッションも見られるようになってきた。このようにインドではサリールが離れがなくなっているが、さりとてサリールへの関心はやむことはない。

と云って、サリールは縫製した服ではなく、基本的に一枚の布である。幅約二メートル、長さ六ヤード(五・四メートル)が標準であるが、階層・地域などによつてサイズにも違いがある。素材は、シルクの手織りのものが上等で、コットン、化繊のもの、機械織り、プリントものは庶民的である。化繊のサリールは洗濯をしても暑い時期にはあつというまに乾くので重宝される。とくに日本製の化繊のサリールはプリントが美しいので、インド人にも人気がある。

同じインドでも、南インドはとくにサリールへの執着が強いようである。チェンナイ市の繁華街、ティ・ナガルでは、老舗も新興も問わず高級サリール店の出店ラッシュ、大型ビルの新築競争がつづいて、サリール離れと吹く風といった風情である。もちろんいわゆる街のパザールにもサリールをところせましと並べて売っている店

がある。当然そこでは客と店主のあいだで熾烈な値切り合戦もおこなわれる。

その一方で、高級店は低い台にサリールをおき、座つて選んでもらえる、呉服屋を思わせるようなつくりになっているところや、デパート風いや高いケースの上に乗せているところもある。結婚式や祭礼のときなどに、サリールを大量に贈与する習慣があるところでは、客が押し寄せ殺気だつた雰囲気になる。店のあちらこちらで、何十枚ものサリールを広げて延々と品定めがおこなわれている。しかしいつたんシーズンがすぎると、安売りがはじまるので、その機会を狙って掘り出し物をさがそうとする人もある。

基本的に一枚の長い布であるサリールは、下半身に巻きつける「ボデー」、その両端を飾る「ボーター」、最後に肩からからだの前または後ろに垂らす「エンドピース(ハットル)」の大きく三つの部分からなる。とくに、ハットルの部分には豪華な刺繍やデザインが織り込まれていたり、また有名デザイナーの作品になると、刺繍やミラーワーク、メタルワークなどを駆使して豪華さが演出されている場合も多い。

サリールは、ブラウスとベチコートをつけ



サリール店の内部(チェンナイ市)



手仕事を現代ファッションに生かす(デリー市)

た上に巻きつけて着るのが基本だが、着方もまた地方や階層によって千差万別である。ブラウスはサリールと同系色であつらえるのが普通である。サリール地にブラウス地が連続して織りこまれているものもあるが、そうでなければ、ブラウス



街のブラウス地屋(チェンナイ市)

地売り場や、街のブラウス地屋さんへ行ってサリーにあう色目のものを買う。その色目の多さ、えらぶ店員の眼力の見事さには、いつも感心させられる。これを仕立屋さんにもついで採寸し、仕立ててもらう。なにことも細かく分業になっているのが、インドのビジネスの特徴である。大きな行事のときに着る高級品だけでなく、サリーは普段着や労働者としてもつかわれる。女性労働者がサリー姿で建材などを運んでいる風景はめずらしいことではない。また、端の部分固定されずに垂れているので、さつとテープ

ルをふいたり、涙をかんだり、お金やお菓子などをちよつと包むのに使ったり、と用途は多様である。ときには、列車のなかで、サリーをハンモックのようにして、子どもを寝かせる風景も見られる。サリーはインド女性の代名詞のような衣装であるが、インド全体に普及したのはそれほど古いことではない。一九世紀後半に、ムンバイのバルシー(ワロアスター)教徒や、ノーベル賞作家ゴッパルの一族がサリーを広める役割を果たし、また画家ラヴィ・ヴァルマーの絵や、映画などの大衆メディアを通じてそれが

人びとにアピールした結果、普及するようになった。インド独立後はサリーをナショナルドレスに、というキャンペーンもはられ、すっかり定着した感があつたが、 پاکستانで広く着られているシャルワール・カミーズへ若者から傾いていったのは興味深い現象である。近年は、コンピュータを駆使した斬新なデザインがあらわれきてきているが、それを実現するのは伝統的な手織りの職人である。この古さと新しさが同居しているところが、インドのインドたるゆえんである。

サリーの贈り物

三尾 稔(おのみる) 民族社会研究部

インドでは、布や衣類は贈り物としても非常に重要である。ヒンドゥー女性の人生最大の儀礼とされる結婚のときも、衣類が盛大に交換される。このとき、その主役になるのはサリーである。多様な性のあるインドのこと、贈与の内容には地域や階層によつてさまざまな差異がある。ここでは筆者がフィールドワークをおこなっているインド西部、ラージャスターン州の都市に住む女性の例に沿つて、贈り物としてのサリーの姿を具体的に



Kさん夫妻と実家の父母

見てみよう。

ご登場願うのは、ウダイプル市に住むKさんである。大学講師の彼女は、これも大学講師である夫と幼稚園に通う娘、二歳になる息子とともに公務員住宅に



農村の結婚式。ホーマ(運摩)のまわりを新郎新婦がめぐめる儀礼。新婦は母方オジから贈られた深紅の衣装で身を包んでいる



ブラマン(バラモン)のウパナヤナ(成人)儀礼のときに、親族から大量に贈られた衣類やバグリー(ターバン)の布。台車に積まれ、ご近所の住民にお披露目される

暮らす。給料は一般の中間管理職よりやや安い、共稼ぎで倅約上手な夫妻は近々郊外に家を建てる計画だ。州都ジャイプルに住む実父は州の高級公務員。インドではまずまず裕福な家庭といえ

るだろう。Kさんが公の場で初めてサリーを着たのは、大学の卒業パーティーのときだった。これはラージャスターンのこの階層の女性の間ではごく普通で、もっと若い娘時

代はレーンガー(スカート)とブラウス、オードニー(上半身にまとう布)姿が一般的だ。「サリー・デビュー」では彼女もご他聞にもれず、母のサリーを着た。母は娘が成長すると娘用のサリーを買いために、ひとり立ちに際してサリーを贈る。大学院の修士修了後に就職したKさんに母は二着のサリーを贈っている。(一、五、七、一、二、二などは縁起のよい数字とされる。

大学講師として働きたすとすぐに花婿探しが始まった。親戚や知り合いを通して経済環境や学歴などで釣り合いのとれる同・カーストの男性が求められた。結婚が決まったのは就職して二年後だった。結婚が決まると花嫁側、花婿側双方の親族間、また花嫁側と花婿側のあいだで膨大な量の衣類が贈つたり贈られたりする。贈り物に関係するそれぞれ

の家庭は、なじみの服屋でサリーや衣類を買付け、どれを誰に贈るのかを家族で延々と相談する。結婚のときにKさんに贈られた衣類を書きだしてみると次のようになる。まず両親から二着のサリー(そのうち一セットはレーンガーとオードニー)、母の実家から一着のサリー(一セットはレーンガーとオードニー)、父方の親族の既婚のいとこから一人につき一着ずつのサリー、母の兄弟(Kさんの母方オジにあたる)から特別なサリー(マーマー・

チュンルリー)を一着ずつ、さらに花婿側から婚約式と結婚式の計二回、サリー、レーンガーとオードニーを一着ずつ(それにアクセサリー一式も二回贈られる)。Kさんの両親は婚約式や結婚式には自らの親族にも花婿側の親族にも男性には洋服のスーツ、女性にはサリーをそれぞれ最低でも一着ずつ贈っている。これらの贈り物は、ほとんど「義務」といっていい。つまり、花嫁に対して今記したような関係にある人は誰でもこれらの衣類を贈ることが当然視されているのである。Kさんのように比較的裕福な一族ではない場合でも、サリーの枚数が少なかつたり質が落ちたりしたとしても、親戚関係がある限りサリーは必ず贈らなければならない。逆にもっと裕福でよい品を数多く贈ればそれに越したことはないが、サリーや衣類に代えてほかのものを贈るということもありえない。もちろん衣類以外の贈り物もあるが、衣類が贈られない限りは結婚の贈り物が終わったとは誰も考えないの

息子の剃髪儀礼(誕生後一年から五年のあいだに、子の無事な成長を祈つて髪をそえる儀式をおこなう)のときには、夫方の親族や自分の男性親族の妻のうち自分より年少の者すべてに衣類やサリーを贈っているし、年に一度のラクシャー・バンタンという祭礼のときには夫の姉妹すべてにサリーを贈る。

贈るというのはどうだろうか。Kさんの家族に聞いてみると、その時もありえないことだといふ。結婚時のサリーその他の衣類の贈与は親族同様の交際を意味する。親族には相応の相互扶助やつき合いがともなう以上、親族外の衣類の贈与のやりとりはほとんど考えられないといふのであ

息子の剃髪儀礼(誕生後一年から五年のあいだに、子の無事な成長を祈つて髪をそえる儀式をおこなう)のときには、夫方の親族や自分の男性親族の妻のうち自分より年少の者すべてに衣類やサリーを贈っているし、年に一度のラクシャー・バンタンという祭礼のときには夫の姉妹すべてにサリーを贈る。

一方、特定の親戚関係にある人が「義務的」に特別な贈与をすることを期待

同様に、子どもの出産後のケガレをとり除き、母と新生児が通常の世間の生活に戻る儀式(スーラジ・プージュナ)では、新生児の母の実家から贈られる、黄色かオレンジの地に赤の縁取りがされたサリーを必ず着ることにしている。このサリーの色自体にケガレをとり除く力があると信じられていたと同時に、この贈り物は実家と婚出した女性やその子との伝統的な関係を象徴するという意味がこめられている。

二児の母となり、大学講師として社会的にも活躍するKさんは、いまやサリーを贈られるだけでなく、機会あるごとに贈るようになってい

い。結婚のときにKさんに贈られた衣類を書きだしてみると次のようになる。まず両親から二着のサリー(そのうち一セットはレーンガーとオードニー)、母の実家から一着のサリー(一セットはレーンガーとオードニー)、父方の親族の既婚のいとこから一人につき一着ずつのサリー、母の兄弟(Kさんの母方オジにあたる)から特別なサリー(マーマー・

息子の剃髪儀礼(誕生後一年から五年のあいだに、子の無事な成長を祈つて髪をそえる儀式をおこなう)のときには、夫方の親族や自分の男性親族の妻のうち自分より年少の者すべてに衣類やサリーを贈っているし、年に一度のラクシャー・バンタンという祭礼のときには夫の姉妹すべてにサリーを贈る。



農村での結婚の際に、新郎側から新婦に贈られた衣装と装飾品

神さまの衣装道楽

奉納されるサリー

杉本 星子 (まぎもと せいじ) 京都文教大学教授

南インドのヒンドゥー寺院の新築儀礼は、何日にもわたっておこなわれる。クライマクスは、寺院の本殿の真上にあたる屋根の上に据えられた壺に祭司が聖水を注ぎ、地上に集まった信者たちが天上から降り注ぐその聖水を浴びて神さまの御利益をいただく大灌頂儀礼(マハーバンバビシエーハム)である。その前後、バナナの木や美しい花々で華やかに飾られた祭壇のまいて、夜通し聖火(ホーゴ)が焚かれていて、祭司がマントラを唱えながら、祝詞(マントラ)を唱え続ける。深夜の闇と静寂のなかで、寺院の灯りだけが煌々と輝き、祭司たちが経文を唱和する声だけが響く。

夜半ごろ、燃えさかる聖火に高価なシルクのサリーが投げ込まれる。上から



富と豊の女神ラクシュミーに奉げる儀礼をおこなうため村の寺院に集まった女性たち(タミルナドゥ州)

油(ギー)が注がれる。聖火壇のなかで、真赤なサリーがメラメラと炎をあげて燃えあがる。女神へのサリーの奉納である。シルクという清浄な素材で織られ、かつ織目がない清らかな衣服であるサリーを媒介として、人びとと神さまが結びつく瞬間である。 どうやら美しいサリーが好きなのは、人も神さまも同じらしい。しかもインドの神さまは、けこう衣装もちである。自然石に目を描いただけの村の女神にも、黄色のサリーが着せかけられている。村の女神のひとり者だが、村祭りは女神の結婚儀礼でもある。祭りの日、村の祭司は女神に人念にお化粧をほどこし、ふだんは金庫に大切にしまわれている宝石の首飾りをつけ、花で飾り、鮮やかな赤いサリーを着せつける。



寺院の新築儀礼で聖火を焚きマントラをと念える祭司(タミルナドゥ州)

大寺院の祭司は、毎朝、寝室に神さまをお迎えに行き、お召し替えをさせ、食事を捧げ、興にのせて、信者たちが待つ本殿にお連れする。日に何度かおこなわれる灌頂儀礼(クンバビシエーハム)では、聖水、ミルク、ターメリック、蜂蜜、ヨーグルトなどご神体を清める。そのあとカーテンがひかれ、ご神体が隠される。信者たちはカーテンの前にとりかひと座り込んで、おしゃべりをしながらひたすら待つ。しばらくしてカーテンが開くと、美しい衣装を身につけ花や宝石で飾られた神さまが現れる。人びとはその神々しいお姿をひと目でも見ようと、首を伸ばし両手を合わせ高く頭上に挙げて拝みながら押し合ひへし合ひするのである。神さまは、ときには王さまの姿をしたり、子どもや行者の姿をして現



神々への織物の奉納、職工組合の額絵(カルナタカ州)

れることもある。神さまのコスプレといった、罰が当たるとどうか。 神さまにお願いをするときには、コナツやバナナ、花、ライムの実、ビロロなどを供えする。大切な誓願をするときにはサリーを奉納する。そのせいもあつてか、大きな寺院の周りには、昔からたくさん織工が住んでいる。寺院では年に一度、奉納された大量のサリーのオークションがおこなわれる。なんといっても、神さまの御利益あるお下がりのサリーである。オークションの収益は大きな寺院収入となる。現在、タミルナドゥ州の大寺院は政府の管轄下に入っている。神さまのサリーは、どうやら州政府にも多大な御利益を与えているようである。

サリーの好みとカーセント——西インド

松尾 瑞穂

(まおみ ずほ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

インド社会が多様な社会集団から成り立っていることはよく知られている。カーセント、言語、宗教、社会階層などの差異は、その人の外見や身のこなし、話し方から容易に推測でき、人びとが日常的に身にまとうサリーにも反映されることがある。たとえば、西インド・マハラシュトラ州のブネーを見てみよう。 州全体では、一七世紀に勃興したマラータ王国を担ったマラータが、人口でも圧倒的に多く、政治分野では支配的である。しかしブネーでは、ベシユワ(宰相)であったブラーマン(バラモン)が王家

に代わり実権を握って君臨したため、サンスクリット文化が花開いた場所となった。このような歴史的背景によつて、ブネーでは、数あるカーセント集団のなかでも、特にブラーマンとマラータとの対比がより鮮明に見受けられる。

ブネーのブラーマン女性にとつての晴れ着は何を置いても、ハイター・サリーである。肩にかかると、バスターには、マンゴー柄とクジャク柄の二種類があり、どちらもすべて手織りで完成までに約一カ月半を要する。そのため値段もやや高めである。バスターの柄の大きさによつて三〇〇

〇から一万ルピー(約七五〇〇円〜二万五〇〇〇円)が相場である。ブラーマン女性にとっては、結婚式、息子のムンジャ(聖祖式)などのめでたい行事にこれさえ着ておけば安心、というものであるが、その分、知人の結婚式に出たら自分と同じハイターを着た人が何人もいて、んざりした、という経験も少なくない。

一方、農村に住むマラータ女性の大半は、茶色や濃緑色の格子柄の生地でブラウスをつくり、どのサリーにもそれを合わせて着る。色の組み合わせを気にしないので、結果としてかなり派手に

る色のサリーを好み、マンガラ・スートラもよく細いチェーン状のものをさりげなくつける。質実剛健で教育熱心なブラーマンは、医師や弁護士などの専門職を輩出し、「きちんとしている」ということを最重視する。さながらブネー社会のビテリタンのような存在である。マラータ王国で育まれたマラーティ文化の体現者としての自負は高く、自らの話し言葉こそが「ビテ・マラーティ」であると言つてはばからない。そのような態度や生活様式はときに他集団から「チツク・ブネーカル」(「けちなブネー人」と揶揄され、「お高くとまった人たち」と見なされる)ことがある。

誤解を恐れずに言えば、このマラータとブラーマンの違いは、大阪人と京都人のそれに近いのではないかと思う。マラータはサリーの色も柄も、ばつと目を引く鮮やかなものを好む。装飾品も大振りであり、既婚者の印であるネックレス(マンガラ・スートラ)は胸の下まで長くしたら、金が二重になった装飾を施してあるものが多い。だから金の装飾品が欲しいときには、マラータ女性に聞けば買いたれているだろうから間違いない、などといわれる。

ブラーマンはというと、小柄模様で明るい色のサリーを好み、マンガラ・スートラもよく細いチェーン状のものをさりげなくつける。質実剛健で教育熱心なブラーマンは、医師や弁護士などの専門職を輩出し、「きちんとしている」ということを最重視する。さながらブネー社会のビテリタンのような存在である。マラータ王国で育まれたマラーティ文化の体現者としての自負は高く、自らの話し言葉こそが「ビテ・マラーティ」であると言つてはばからない。そのような態度や生活様式はときに他集団から「チツク・ブネーカル」(「けちなブネー人」と揶揄され、「お高くとまった人たち」と見なされる)ことがある。

特集 暮らしのサリー



ブラーマンの婚約式。花嫁は結婚式とあわせて最低5〜6枚のサリーを用意する。金ボウダーの太さがフォーマル度を高める



ハイターのパルルは、産地によつてもマンガラ柄とクジャク柄がある

貧困のなかのサリー——北インド

菅野美佐子 (かんのみさこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

私がワールドワックでインドに滞在していた二〇〇四年の四月に、北インド最大の州、ウタル・プラデーシの州都であるラクナウという都市で、ある痛ましい事件が起こった。その月末におこなわれる総選挙に向けて、ある政党がキャンペーンで貧しい女性たちに無料でサリーを配るようになった。当日、会場には総勢一五〇〇〇人が集まったが、スタッフがサリーを配りだすと、押し寄せた女性たちが将棋倒しとなり、二三人もの命が奪われた。その多くは情報を開きつけてやってきた、スラムなどに住む貧しい女性と子どもであった。なぜ女性たちはそれほどまでにサリーを手に入れたかったのだろうか。私が調査をしていた北インドの農村女性の暮らしから、理由を推測してみよう。

私は、この惨事が起きたラクナウから東に二五〇キロほど離れた、ある村に滞在していた。村の女性たちもついているサリーの数は平均して二、三枚。村の外に出かけることができない女性たちは、自分でサリーを買えず、親族からもらってサリーを大事に着ている。毎日の沐浴のときに洗濯をするが、薄手のサリーであればあつという間に乾いてしまう。着替えの心配はないが、そのかわり裾

がほころび、穴の開いたサリーを毎日着回すことになる。だから私がいる村を訪ねようとも、彼女たちがバラ（ハット）で顔を覆っていたように、おなじみのサリーのおかげでそれが誰なのかがすぐにはわからない。青地に黄色の花模様のサリーはミナクシ、黄色地に赤いラインの入ったサリーはリターという具合に。乾期もビークを迎えたある日、村に行くとき、ミナクシが「つきた」と泥まみれのサリーで出迎えてくれた。家の泥壁の塗り替え作業でもしていたのだろう。サリーは膝までたくし上げられ、そこからのぞく脛や黒く日に焼けた細い腕、パツラーに半分覆われた顔までも泥だらけである。

サリーというとき、一枚の長い布をドレープをつくりながらきれいに体に巻き付けた優雅なイメージがある。しかし村用のサリーは短めで、ドレープをほとんどつくらない。パツラーも通常は肩の前側から後ろに垂らすのが、体に巻く分の布を節約して後ろから前に垂らす。ミナクシのサリーもへその部分に折り込むブリーツなどない。くしりと束ねられただけで、腰で結ばれたベチコートのひもと腹のあいだに無造作に挟み込まれていた。ブリーツなど気にしていたら

仕事はできないのだ。

彼女たちにとつて、お祭りや結婚式は唯一サリーが手に入るチャンスである。実家の兄や夫、姑が新しいサリーを買ってくれるかもしれないからだ。しかし、それも彼らの懐に余裕があるときだけ。もらえないことも多い。そのときはまた古いサリーを着るしかない。

村の外に出かけることなく一日中働いている女性たちにとつても、きれいなサリーは魅力的である。たまに村にやつて



ひと仕事終えて、家の陰でくつろぐ女性と子どもたち

くる保健ワーカーのきれいなサリーをうらやましく思うこともある。しかし、その日暮らしの彼女らにはサリーを買う余裕はない。

選挙キャンペーンでサリーを求めて押し寄せた女性たちは、きれいなサリーで町を行き交う女性たちを横目にしつつ、いつも同じサリーを着ているにちがいない。彼女たちにとつて、新しいきれいなサリーを手に入れることは、大きな喜びだったのであろう。



サリーのパツラーは肩から垂らすのではなく頭から被るのが村の女性の一般的な着こなし



家畜用に集めた飼料を頭に集せ帰路につく



女性たちもサリーが汚れるのをいどわず、下水用水路づくりに参加している

サリーで花嫁さんごっこ——バン格拉デシ

南出 和余

(あみなみ かずと)

総合研究大学院大学文化科学研究科



花嫁さんごっこで着飾る子ども(10歳)



花嫁さんごっこでサリーに巻かれる女の子(5歳)



新郎から贈られてきたサリーやアクセサリーで着飾る花嫁の姿(15歳)



スーツケースで新郎側から届けられるサリー

嫁」の象徴として遊ばれるには理由がある。バン格拉デシ農村で暮らす彼女たちがサリーを日常的にまとうようになるのは、結婚後のことである。それまでは、サロワ・カミース(シルワール・カミーズ)とよばれるワンピースの下に幅広のスポンをはいて、オールナと呼ばれる長いシヨルを肩からかけるのが一般的な服装だ。サロワ・カミースは一〇歳ごろから着るようになるが、それまではワンピースやちようちんパンツをはいている。つまり、彼女たちの服装は、ワンピースからサロワ・カミース、そしてサリーへと変化するわけだが、ワンピースからサリーまでの道のりは、それほど遠くはない。

一四、一五歳、遅くとも一八歳ごろまでには大半の女性が親によつて決められた結婚をするこの社会では、彼女たちはある日突然サリーを着る日を迎える。結婚式は新郎新婦双方の家においておこなわれるのが一般的で、ことに新郎側でおこなわれるお祝いは盛大である。花嫁は、結婚のための沐浴をし、新郎側から贈られる特別なサリーをまとう。化粧をして着飾る。この一連のプロセスを手伝うのは、しばしば兄嫁たちだ。

結婚の際には、結婚式の特別なサ



結婚式の日、沐浴のあと兄嫁たちにサリーを着せられる花嫁(14歳)

暮らしのサリー

特集

結婚や祭りの際、家に新しいサリーが届くと、それは子どもたちのごっこ遊びの格好の材料となる。女の子たちは、新しいサリーで「花嫁さんごっこ」を始める。長さが五メートル以上もあるサリーは、子どもたちの体には断然大きすぎて、「子どもたちがサリーを着る」というよりも、「子どもたちがサリーに巻かれる」という有様だ。それによって彼女たちは、母に贈られたサリーを自らまとい、化粧をして「花嫁さん」を演じて遊ぶ。普段着であるサリーが、ハレの日の「花

リーのほかに、普段着用の数枚のサリーや、アクセサリー、化粧道具一式が贈られる。最近ではそれらはスーツケースに入れて届けられる。新郎側からスーツケースが届くと、大人も子どももいっせいに群がる。スーツケースのなかには、花嫁のためのサリーのほか、母や祖母たちのサリーも入っている。さらに両婚家では、祝儀のサリーが親戚中に贈られる。結婚を機に多くのサリーが行き交う。そうして家に贈られてきたサリーが、子どもたちの「花嫁さんごっこ」の道具となるのだ。子どもたちは、嫁ぎゆく姉のサリー姿を目にし、そして、自分も真似事をする。

まだ心の準備もないままに結婚する彼女たちだが、数日後に嫁ぎ先から初めての日着をするときには、晴れやかな顔で、しっかりとサリーをまとうて帰ってくる。何度も練習してようやく自分で着られるようになり、それでもサリーでの生活に身動きのとりづらさを感じる私には、結婚を境にサロワ・カミースから平然とサリーをまとうようになる彼女たちの変身ぶりを、敬意の眼差しで見たいが、その背景には、彼女たちの幼いころの「花嫁さんごっこ」があるのだろう。

憧れの女優ファッション——フィジー

村田 晶子 (むらたあきこ) 総合研究大学院大学文化科学研究科



結婚式前夜。生バンドの演奏でダンスに興じる小学生

南太平洋の島国であるフィジーには、インドからおもに契約労働者として来島した移民の子孫が暮らしている。その人口は約三十三万人、総人口の約四〇パーセントを占めている。町にはインド系の人がびとが経営するサリー店や貴金属店が軒を並べ、その光景は「南太平洋の小インド」ともいえる雰囲気を感じ出している。しかし、サリー姿で町を歩く女性は、少なくなりつある。

のサロジは、町の会社に勤めている。毎朝、スカートにブラウスなどの装いで出勤し、週末に出かけるときには、ジーンズにTシャツと、西洋の若者と違わない装いを好む。彼女がサリーを着るのには、ヒンドゥー教の祭りであるデーワリーや親族の結婚式など、年に二、三回に過ぎない。ところが、こんな彼女もサリーへの思いは依然として強く、「サリーを着る」というときには、町中を右

往左往する。彼女の思いの源のひとつは、インド映画にあるようだ。彼女の部屋には、チラシなどに掲載されていたサリー姿の女優の切り抜きが、こかしに何枚も貼られている。その切り抜きを見ながら、「こんなサリーが欲しい。髪型もこんな具合にして」と、話していたのを記憶している。

インドの地を踏んだ経験もなく、インドを知る人の話を聞く機会もほとんどない。そして、マスコミでインドが取り上げられることも珍しい。そんな環境にあつて、常に人びとにインドを提供しているのは映画であり、人びとにとつてもっとも身近なインドは、映画で見るといっても過言ではない。音楽やダンスなど、映画が人びとに与える影響はさまざまであるが、やはり女性にとつては、豪華なサリーを身にまとい、華麗に登場する女優の存在が大きいようだ。女性たちは映画のなかの女優の姿に憧れを抱き、サリーを身にまとう女優こそが、彼女たちが求めるインド女性像になるのであろう。

あるとき、女性五人で、親子の情愛を描いた話題の映画を見に行った。映画館では派手していた彼女たちであったが、その後しばらくのあいだ、彼女たちの話題の中心はストーリーではなく、女優の



結婚儀礼を終えたばかりの新婦。赤いサリーは花嫁のしるし



新郎の到着を待つ新婦



旗のサリーで南インド系文化団体の全国大会に参加した女性たち



祭りを終え、歌とともに帰途につく女性たち

美しさとサリーについてであった。女性たちは、色や柄、生地、風合い、アクセサリーや髪型との調和、そして、着こなしなど、サリーの装いの手本を映画に求める。その結果か、サリーを着るときには力がこもり、まるで映画の一場面ともいえる光景が生まれる。

年齢による差はあるものの、サリー離れは否めない。しかし、たとえ一年に数回であっても、重要な祭事の折には、鏡つてサリーで身を飾る。

フィジーで、映画に描かれているインドを再現することは難しい。そんななかでも、再現可能なのが、サリーの装いなのかもしれない。そして、フィジーのインド系の人びとは、女性たちがサリーを身にまとい、集う光景に、インドを見るのである。

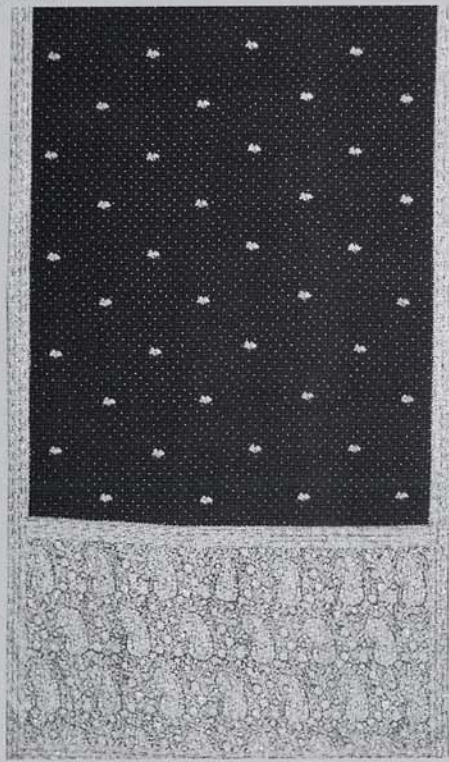
表紙モノ語り

トップ・デザイナーのサリー

特別展「インド・サリーの世界」出版作品(標本番号H0228432) デザイン/リトウ・クマール 幅116.5cm 長さ532cm

杉本 良男

先端人類科学研究部



リトウ・クマールは、一九六〇年代からインド・ファッション界をリードしてきたデザイナーで、その名声は世界的に広まっている。最近のインドの週刊誌「アウトルック」の特集号で、現代インドのナンバーワンデザイナーに選ばれている。一九八〇年代末から、インド出身のデザイナーが世界に次々と進出しはじめたが、その先駆者として、いまも第一線で活躍しているトップ・デザイナーである。

なモチーフを重視し、とくにマハラジャ家のファッションやインド西部の民族衣装からインスピレーションを得て、エスニック趣味の現代ファッションを生みだしている。六〇年代から、ザルドジとよばれる金糸刺繍を取り入れたサリーや、ガウテラ、レンガとよばれるスカートなどを取りはじめた。その後、東西の趣味を融合したいわゆるインド・ウエスタン風のファッションを世におくりだし、次

的な影響を与えてきた。ここにとりあげたサリーも、薄手のクレープ地に銀糸刺繍などを配した豪華なものである。写真はその一部をフロリアアツブレしたのだが、インドからヨーロッパにわたって世界に広まったペイアリー柄が印象的である。ペイアリーは、インドのカシミヤ・シヨルが一九世紀なかばにヨーロッパで注目され、イギリスのペイズリー村で模造品がつけられたことで世界に広まったといういきさつがある。

土族民俗村の出現——中国青海省「その2」

庄司博史（「まよひひろし」 民族社会研究部）

一九

九九年晩秋、私は土族のA村をふたたび訪れた。六年前調査の途中、思いがけない大歓迎を受けた村である。今回は翌年に計画していた民族誌映画撮影の下準備をかねての突然の訪問であった。以前うけた村民あけてのもてなしと土族にしては派手で明るい歌と踊りが忘れられず、まささまに撮影候補にあげていた。

歓迎の立役者であった老人はすでに三年前亡くなっていたが、招待のきっかけをつくってくれた青年やその仲間の驚きとよろこびは相当のものであった。あつという間に集まった人びとから意外なことを耳にした。いまやこの村は互助県随一の観光村として大発展したというのだ。夏には外国人もふくめ三万人もの観光客が土族の



村へ通ずる道にかかげられた橋頭標「小庄民俗接待村」



観光客がやってくると園く間みやげ物売りがとりかこむ

歌や踊りの見物にやってくる。おかげで、周囲の村には及びもつかないほど潤ったという。例の青年の家の一室はごきれいにとのえられ、テレビでみた都会の家をまねたらしく、レスクスキのダブルベッドのそばには赤いブッシュホン電話が回線のひかれるのを待っていた。

北京から空路二時間に短縮されたとはいえ、青海はチベット人やモンゴル人、おまけに珍しい土族などの住む異国情緒はばのたところである。省都にもっとも近いこの土族村で純朴な農民の歌や踊りにふれられるとあつては、観光業者も放つてはおかない。中国人だけではなく、アメリカ人もカナダ人も、そして日本人もやってくるという。

何より驚いたのは、それが私の功績になつていくことである。六年前私が彼らを写真にとりビデオにおさめてかゝつた翌年から、世界中の人びとが訪れ始めたというのだ。功労者として像を立てることさえ考えたときまじめな顔でいう。おかげで、翌年の撮影には全面協力の確約は得たものの、半信半疑のまま、秋の収穫にいそむる村をあとにした。

翌年夏、撮影のため互助県を訪れた私は、スタップと真つ先にその村におもむいた。車が通れる幅に広げられたかつてのあぜ道には「小庄民俗接待村」という横断幕がかかげられ、広場に到着するやいなや、みやげ物の帯飾りなどを手

にした女性や子どもたちがとびだしてくる。まもなくスピーカーから安眠の歌がながれだし、背広をきた責任者らしい男性があらわれた。西寧市の役人だったが、この村で観光客の受け入れを任切っているらしい。差し出された名刺のうらには、受け入れ人数、歌と踊りの演目数、食事の等級とこの値段表がある。私の旧友たちは、愛想こそよかつたものの、家ごとに観光団体を受け入れればじまのとなつては、客をめぐめるライバルどうしであった。

結局ここではたいして撮影はしなかった。派手なだけで簡素化された衣装、日に何度とくりかえされる踊りに、もはや情熱は感じられなかった。別れきわ、観光バスが到着した。われ先みやげ物をもてむらがる村民と距離をたもとうとする中国人観光客。観光地では見なれた風景がそこにはあった。

日本にもどりウエブサイトで偶然、観光で発展する土族村A村の記事をみつけた。貧しかった村が、いまでは年収の半分以上を観光から得ているという。人によつては七五〇〇人も観光客を受け入れ純益六万円（約八〇万円）を得る者もあるとある。例の青年のことだ。初めて受け入れた日本人に気に入られたことがきつかけとなった、ともある。件の話はどうやら本当だったようだ。しかし、私の像を立てる話は残念ながらいまだ聞かえてこない。

標本資料を守る人たち

日高 真吾（ひたかしんご）
文化資源研究センター



常設展示場で毎朝おこなわれている点検



収蔵庫から出され、展示などで活用される資料の点検



二酸化炭素処理用のバッグの組み立て

民

博が所蔵する資料は大きく標本資料、映像音響資料、図書資料に分類される。このなかで展示場に展示され、収蔵庫に保管されている資料は標本資料であり、その数は二〇〇四年四月現在で約二四万点という膨大な点数にのぼる。このような膨大な数の標本資料を収蔵し、研究資料として活用するためには、当然、これらの標本資料をつねによい状態で管理しなければならない。ここでは、民博において標本資料を守っているスタッフの活動の一部について紹介しよう。

標本資料を管理する部門には、大きく分けて二つのグループがある。ひとつは展示場に展示されている標本資料を管理するグループ、もうひとつは収蔵庫に収蔵されている標本資料を管理するグループである。

展示場グループの活動は毎朝、開館前の誰もいない展示場を巡回することからはじまる。この巡回は破損した標本資料がないか、展示資料を固定する演具の不具合がないかを確認するとともに、標本資料に虫害が発生していないか、点検をおこなうためのものである。巡回の結果は、点検用の展示場マップに記入していくことになっている。なお、この点検用の展示場マップには、長年の点検で蓄積されたデータから、虫害の発生しやすい標本資料の場所が示されており、その箇所はより入念に点検する仕組みとなっている。

収蔵庫グループは、特別展や企画展に出展される標本資料や他機関の博物館へ貸し出す標本資料の点検をおこなう。資料の材質を分類し、それぞれの資料に生じている破損や汚損な

どの劣化状態を点検するのだ。また、展示場で虫害の発生した標本資料や国内の博物館に貸し出した標本資料の防虫対策もおこなわれている。防虫対策の一環として、館内で発生した虫害資料や、国内の博物館からの返却資料には、二酸化炭素を用いた殺虫処理が収蔵庫グループによつてほこされる。

このような活動のなかで標本資料に生じたさまざまなトラブルの理由と状況が明らかにされていく。そして、ここで明らかになつたトラブルはすべて保存科学を専門とする園田直子助教や筆者に報告され、その対処方法を協議し、対応する体制となっていく。

ここで紹介したような活動は、文化財の保存科学の分野では予防保存とよばれ、日常の管理のなかで事故を未然に防ぐ、もしくは発生した事故の被害を最小限に食い止めることを目的としている。作業自体はとも地味であり、人的、時間的に手間がかかることから、他の博物館において日常業務に導入している例はなかなか見られず、民博独自のものとなっている。しかし、こうした活動によつて民博の財産である標本資料は守られているのだ。つまり、この作業に従事しているスタッフこそが、まさに民博の「標本資料を守る人たち」なのである。

デーヴァナーガリー文字で 日本語を書く②

町田和彦 (まちだ かずひこ)
東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所教授

前回は、日本語の五〇音、濁音、半濁音のかな文字に相当するデーヴァナーガリー文字について説明した。これだけでもかなりの日本語は書けるが、もう一息がんばろう。今回は、まだ出てこなかった「ん」、「がっこう」、「きょうと」なども書けるようになる。

あなたの知り合いに日本に来たばかりのインド人がいるとしよう。彼(あるいは彼女)は、日本語もかな文字ももちろんぶんぶん読んで、読めるのはデーヴァナーガリー文字だけ。そしてこのインド人にとっても「新幹線の京都までの切符をください」という日本語(の発音)だけは教えてあげなければいけないという状況である。問題は「しんかんせん」、「きょうと」、「きつぷ」だ。日本語をデーヴァナーガリー文字で書くということは、かな文字をそのままデーヴァナーガリー文字で置き換えるのではなく、読めば日本語の音になるべく近くなるようにデーヴァナーガリー文字を書くことである。こういうときは、いったんかな文字の日本語をヘボン式のローマ字で書いてみよう。デーヴァナーガリー文字に直す音の連続がみえて

くる。

「しんかんせん」は shinkansen、「きょうと」は kyoto、「きつぷ」は kippu だ。これらに共通しているのは、後ろに母音が来ない子音だけの n や k や p が含まれていることである。子音だけをデーヴァナーガリー文字でどう書けばいいのだろう。前回少し説明したように、デーヴァナーガリー文字の子音字は単独では子音だけではなく、「か、が、さ」のように本来「あ」を含んでいる。

まず n つまり「ん」の書き方だが、これは簡単に文字の上に点をつける。表①は「ん」がある場合とない場合の例をあげている。ただし、語末の「ん」は点でなく、「な行」の子音字の下に斜めの線を引く。この斜めの線は子音字に含まれている母音(デーヴァナーガリー文字の場合は「あ」)を打ち消す働きをする。「ん」以外の子音をあらわすには、子音字の書き順の最後を省略した形を使う。デーヴァナーガリー文字の子音字は書き順が縦棒で終わるものが多いのだが、これらは縦棒を省略する。この

ように子音字の書き順の最後を省略したものを半子音字とよぶ。そして半子音字と子音字を組み合わせたものを結合文字とよぶ。この結合文字は、子音字と同じ要領で、上下左右に母音記号をつけることができる。これで「きつぷ」などの促音や、「きょうと」などの拗音をデーヴァナーガリー文字で書くことができるのである。表②は、日本語でよく出てくる促音や拗音の書き方の例がでている。結合文字を構成する子音字と半子音字の形もあわせて比べてほしい。

最後の表③



ニューデリーの道路標識。上からヒンディー語のデーヴァナーガリー文字、英語のローマ字、パンジャービー語のグルムキエ文字(左)ウルドゥー語のアラビア文字(右)

図①

位置	「ん」あり	「ん」なし
語中	さんか सांका sankā	さか साका saka
	さんど सांदो sando	さど सादो sado
	さんば सांबा samba	さば साबा saba
語末	いけん इकेन् iken	いけ इके ike

図②

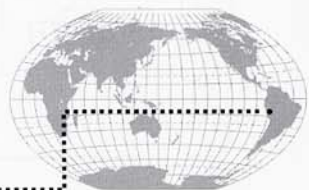
結合文字					
子音字	半子音字	促音	例	拗音	例
क	क् k	क्क	गाँकौ गाक्को gakkō	क्य	きょうと क्योतो kyoto
ग	ग् g	ग्ग	बाँग् बाग्गु baggu	ग्य	ぎゃく グヤク gyaku
स	स् s	स्स	आँसारी आस्सारि assari		
न	न् n			न्य	ニャー ンヤ nya
ब	ब् b			ब्य	びょうき ブヨキ byoki
प	प् p	प्प	होँपेटा होप्पेटा hoppeta	प्य	はっぴょう ハッピー happyo
म	म् m			म्य	みょうじ ミョジ myoji

図③

しんかんせん	の	きょうと	まで	の	きつぷ	を	ください
shinkansen	no	kyoto	made	no	kippu	o	kudasai
शिंकांसेन्	नो	क्योतो	मादे	नो	किप्पु	ओ	कुदासाइ

チュルカナスの焼きもの

藤井龍彦 (ふじいたつひこ)
国立民族学博物館名誉教授



いつか調べてみたい……

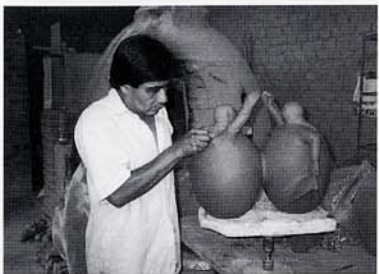
残念ながらもはやなくなりましたが、かつてペルーのおもな都市、少なくとも大都市をもつ都市にはストウティウムという名の木屋があり、そこでは学術的な本を入手することができた。一九八五年、ペルー南部アレキパ市のストウティウムで、「粘土が私たちをつなぐ」という本を購入した。著者はヘラシモ・ソサ（実際はル・カミノによる聞き書き）。この本により私は初めてチュ

ルカナスの焼きものを知った。石を使った磨き、たたきによる成形、ネガティブ・ペインティングによる装飾、いずれも先スペイン期の土器製作技術である。なぜ中央アンデスでも北の端のピウラ地方でという疑問。いつか調べてみたいものだと思った。

それから九年後の一九九四年、念願のチュルカナスの焼きものを調査する機会がやってきました。チュルカナスは、ペルーの首都のリマ市の北約一〇〇キロメートル、エカアドルとの国境に近いピウラ市からローカルバスに乗り換えて、さらに東へ六



ヘラシモの工房。手前に座っているのがヘラシモ



生乾きの作品に線描きの装飾をほどこすヘラシモ



台の上に載せた壺のまわりをまわりながらたたいていく

〇キロメートルほど行ったところにある。前述の本の事実上の著者ルベさんが、偶然友人の人類学者の姉であることがわかり、その伝でヘラシモへの紹介状をもらってはいしたが、いきなり行って「チュルカナスの焼きものについて調べてほしいのでよろしく」などと言ったところで、「はい、どうぞ」と応じてもらえるものであろうか。日本でも職人は気難しい人が多いというではないか。

赤道直下に近いチュルカナスの町で、頭の上から照りつける太陽のなか、バスターミナルからモト・タクシーというバイクを改造した三輪タクシードでヘラシモの家を探す。町の中心からとんとん走り、そのうち道路の舗装もなくなつて町外れに近くなつてくるではないか、と思っていると、「ここだ」という。チュルカナスの焼きものの創始者の一人であるヘラシモの家か工房なのだから、大きな看板でもかかっているのではという想像は完全にはずれ、どちらかという粗末な家だった。しかし、住所をみると確かにルベの紹介状と一致する。おそるおそるドアをノックすると、なかなか上半身裸の中年の男性が顔を出した。「ヘラシモさんですか」「そうです」。ヘラシモとの最初の出会い。気さくが短びんをはいたようなヘラシモは、突然現れた私に別に驚いた風もなく、なかへ招き入れてくれた。天井は高いが薄暗い

工房は、土間であるせいかほこりっぽくがらんとしていて、とてもエストロの仕事場とは思えない。奥へ行くとオベラリオとよばれる手伝いの若者が三人、粘土をこねたり、石で器面を磨いたりしている。

訪問の趣旨を話すと、「どうぞ、好きなように」ということで、あつけないくらい簡単にチュルカナスの焼きものの調査が始まった。調査の結果はすでに『季刊民族学』八四号に書いたのでここではふれない。

さあ、困った、困った

さて、そこからが大変。粘土をこね、形をつくり、装飾をほどこし、窯で焼くのであるから、一日やそこらで完成するものではない。チュルカナスの場合はそれに丹念な磨きと、この地方特産のマンガの葉を使った、びしょ濡れという工程が加わる。当然のことであるが、ひとつの作品だけをつくる

てゆくわけではなく、いくつもの作品を平行して制作する。というわけでチュルカナスの焼きものの全制作過程の記録をとるのに、非常に時間がかかる。おまけに寡黙なヘラシモは何もいわずに突然仕事を中断し、自転車にまたがってどこかへ行ってしまふ。

また、ハミリビデオを使って記録をとったのが困ったのは工房のなかに大音響のラジオ番組が四六時中流れていることであつた。よその家に勝手にやつてきて仕事をさせてもらっているのでもない。チュルカナスのたつき技法で壺を成形するときの「人間ろくろ」、つまり作品のまわりをぐるぐるまわりながら、石と板でたたいて形をつくるときの「ボン、ボン、ボン、ボン……」というリズムミカルな音がうまく録音できなかつた。

このときの調査、標本収集における苦労は、チュルカナスの暑さやホテルでの蚊の襲撃もあつたが、いちばん困つたのは収集品の入手であつた。ヘラシモをはじめおもな焼きもの師は、主として外国からの注文を受けて制作しているため、在庫というものをもちたないか、あつてもきわめて少ない。ヘラシモの工房にも二〇前後の作品がほこりをかぶつて置いてあつたが、すべて注文品であるため譲つてもらうことができなかった。

結果として、ピウラ市の二人の女性の収集家を紹介してもらい、彼女たちから購入することができたので、ラシモと妹のフナ、義理の弟のセグンド、その他サントディオ、マルティン、ポロ、マネノなど、チュルカナスのおもな焼きもの師の作品合計一〇〇点余りを収集することができた。もうひとつの心配が、日本のようにエアークラップなどの梱包材がないペルーで、割れ物である焼きものを梱包し、リマまで運ぶことであつたが、幸いこの問題も扱いは慣れている彼女たちに頼み、無事リマで受け取ることができた。



窯入れを待つヘラシモの作品



窯詰めをするフナ



たたきによる成形作業

広がる 嘸む樂しみは

石田 慎一郎 いしだ しんいちろう
国立民族学博物館外来研究員
日本学術振興会特別研究員



ミラー
(学名:Catha edulis)

ニシキギ科の常緑低木。イエメンをはじめアラビア語圏ではカート、エチオピアではチャット、ケニアではミラーとよばれている。摘みとった瑞枝(地域によっては新芽や若葉)を嘸むことで覚醒作用を得られることから、一部の国では法律で使用が規制されている。ケニア国内最大の生産地である中央高地のニャンベネ山麓一帯では、利用の歴史が古く、19世紀末に出版された探検記にも記録が残っている。

嘸む嗜好品「ミラー」

石ころだらけの坂道を下ると、若者たちの溜まり場がある。昼下がりの蔭だるような暑さのなか、私は、若者たちになじりてしばしば疲れた身体を休める。ひとまわり挨拶の握手をして腰を下ろすと、若者の一人が、ミラーをひと束分

けてくれた。緑色の葉っぱを落とし、赤みがかった瑞枝を口のなかに運ぶ。こうして仲間とともにミラーを嘸んでいると、いま自分はメル(ケニアの村)にいらのだとあらためて思う。

ミラーとは、ここケニア中央高地のメルの人びとのあいだで、嘸む嗜好品として古くから愛用されてきた樹木の名前である。口に入れるのは摘みとった新鮮な枝で、それには弱い覚醒作用

がある。眠気を吹き飛ばすとも、身体の疲れをとるともいわれる。わずかに苦みがあるので、メルの人びとは、ビーナツツと一緒に嘸んだり、ミルクティーや炭酸飲料をすすりながら嘸んだり、あるいは砂糖をなめながら嘸んだりする。アイディア次第で味わい方は変わる。

楽しみ方は多種多様だといつても、日ごろから嘸んでいるのは男性だけで、女性で愛好家というのは見たことがない。女性か嘸むのは、たとえは一生に一度の場面だ。恋人どうしの間柄にある男女が結婚の気持を固める。すると、相談を受けた彼の父親が、彼女の父親のもとに一束のミラーを持参する。彼女が、自分の父親の前でそのミラーを嘸むならば、結婚を望んでいるという正式な意思表示になる。ミラーにはそんな用途もある。

国内外各地へ広がる市場

ミラーは、村人にとって、日々の生活を支える貴重な収入源でもある。村の人びとがつくる換金作物といえは、むかしはコーヒーが主流だった。けれども、一九九〇年代になると、市場価格が低迷したコーヒーに見切りをつけて、ミラーの栽培に切り替える人が急増した。

良質のミラーは、ケニアでは、土壌や気候の適したメル(ケニア)の土地でしか栽培できないといわれる。しかも、次から次へと新芽を育み、一年を通して収穫が絶えない。村人たちは、この恵みの木を大切に、枝葉の剪定や防虫など日ごころの手入れを怠ることはない。

メルの人びとがつくるミラーの買い手は、その多くがソマリだ。ソマリの人びとは、隣国ソマリアのみならずケニア国内にもいるし、なかには内

戦のために難民として欧州に渡った人々もいる。こうして、ミラーに対する需要は、国内外で各地に広がっている。かつてメルの人びとにとって、ミラーは自分たちが楽しむ分だけで十分だった。それがいま

はお金になる作物になり、村のあちこちに植えられるようになった。そして、収穫量を増やすために必要以上の農薬を散布する人や、学校を欠席してまで収穫や出荷の手伝いをする子どもまで出てきて、村で大きな問題になっている。

村の人びとは、老木から摘み取ったものが美味だという。二〇一〇年のあいだに植えられた数多くの若木とはだいぶ違うのだ。新しい時代を迎えたい、人びとは、ミラーとの上手なつきあいを模索している。



ミラーの瑞枝は、幹のいたるところから次々と生えてくる。10センチ以上の長さになれば収穫できる



手の届くところで収穫できるよう、上に伸びる枝葉を剪定するので、ミラーの木が多くこんな形状になる



葉を取り除いたミラーはしばしば乾かしておく。朝露でしめったまま梱包すると日もちが悪くなる



梱包のすんだミラー。これらがソマリの商人の手に渡り、ソマリアや欧州に向けて出荷される



マーケットの脇の加工現場では、男女の労働者が葉をとり除き、長距離輸送用に梱包する



早朝、村のマーケットではミラーの取引が始まる。ここで収穫物が生産者から村内の加工業者の手に渡る

ダイエット作戦

トンガでは国をあげてダイエットに取り組んでいる。名付けて「ダイエット作戦」！トンガ政府中央計画省と日本人海外協力隊のエアロピクス隊員が、村や小学校を指導したおかげで、今やエアロピクスは小学校の運動会の出し物の定番となった。首都ヌクアロファではダイエット・コンテストもしばしば企画されている。この作戦は、エアロピクの授業が必修の小学生と、見た目を気にする。一部のトンガ人のあいだでは成功している。しかし、大抵の村人にとって、ちよつとまで歩きにできる散歩だけが彼らの「運動」である。

作戦の背景には、トンガ人の食生活の変化がもたらした肥満、糖尿病、高血圧症の拡大がある。もともと砂糖を意味するスカというトンガ語が、そのまま糖尿病をも意味するほど、トンガ人にとって身近な糖尿病治療のために、一九九〇年代には、首都にある病院の一角に外国政府の援助で専門棟が建てられた。この棟に



体育祭の出し物でエアロピクを披露する小学生。トンガ語で「エアロピク」とよばれている

は朝から五〇代から六〇代の男女を中心とする長い列ができる。患者たちは簡単な問診、血糖値と体重の計測のあと、薬を受けとる。なかにはこの診察に満足できず、ニュージーランドやアメリカなどに出張きにてた家族を頼り、国外の病院で診察を受ける人もいる。

肥満と糖尿病をもたらした最大の要因として指摘されているのが、輸入品の羊肉(シビ)である。トンガで売られているシビは、生後一年以上のヒツジのバラ部位である。骨のまわりの少量の赤身を除いて大半が脂身(ガゴ)である。トンガ人は鯨肉を伝統的に食べていたが、捕鯨禁止以降食べられなくなった。日本でも商業捕鯨が停止して供給量が激減した後、鯨の大和煮の缶詰が一時羊肉の缶詰に切り替わって出回ったと聞いたことがある。

シビがトンガの人びとに好まれるのはその脂身ゆえである。シビは、骨付きのまま細切りにして焼くだけか、野菜などと炒めるか、蒸すかして食される。一九六〇年代から、ニュージーラ



村人が日常的に利用する村の小商店(ファレコロア)、外国からの輸入品が並ぶ。標の最上段はすべてコーンビーフ、最下段は魚の缶詰

ンド産の安いシビの輸入量は急増し、イモと魚心の食生活にシビが付け加わった。彼らの不健康な脂太りはその結果であるといわれている。

シビはちよつと高価

トンガ人は、プタ、ニワトリ、ウシ、ウマ、ヤギといった家畜をおもに儀礼や祭礼での食事のために飼っている。私が滞在したある島では、一八九六年ニュージーランド人が羊牧場経営を始めたが、ヒツジ泥棒が横行し、ついに牧場主は経営を諦め、ヒツジを置いて島を去った。その後、島の人びとによって残ったヒツジも食べ尽くされてしまった。彼らがヒツジを飼わないのは、泥棒をおそれるからか？

通常、トンガの人びとがおかずに食べるのは、冷凍シビとコーンビーフである。いずれも輸入品であるうえ、購入には消費税が一〇パーセントかかる。一キロあたり三二・三五アンガ(二八〇〜二二〇円)もするシビは、庶民の日常の食卓にあがるほどは安価ではない。

人びとの日々の食事は質素である。畑に行く朝は、薄めの紅茶、あるいは裏庭に生えているレモングラスの葉を煮出したお茶に、砂糖をたらふり入れて、それに乾パン(マー・バク)を浸して食べる。夕方畑から帰ったあとは、蒸したイモに、小商店で購入した二バアンガ(約六〇円)の魚の缶詰がおかずである。小麦粉を水でといて団子を煮て、砂糖を煮たカラメルをからめたものが朝食で、夕飯は乾パンと紅茶だけ、という日もある。

招き合いが巨体をつくる

では、巨人のイメージをもつトンガ人の肉体はどこでつくられるのか。また、いつシビを食べて不健康な脂太りになっているのか。その答えは、共

食・祝宴の機会の多さである。他人の家を訪問すれば必ず食事に招かれるし、伝統的なゴザ編みや樹皮布づくりの共同作業に参加したり、教会など人が集まる場ではかならず食事がつきものである。この日は、細切れにしたシビ入り野菜炒めが出された。

トンガ人の家庭を訪問する。たちまち第一声、「おなかがいらないかい(フエカイヤ)?」ときかれる。日本流に「今食べてきたのでおなか一杯です」と遠慮しても、「これしかないけどお食いなさい」とその日のその家族の食事が振る舞われる。こうして何軒か回れば、満腹である。一方、訪問者をもたない自分たちの食事がなくなつた家族は、親族を訪問し、食事にあずかる。いつも誰かが誰かの胃袋を支えている。

祝宴は日曜日(とに村り)とかで開催されている。教会の信徒宅がもち回りでおこなっているからである。参加すれば、石蒸し(ウム)料理をはじめ、プタの丸焼きやシビに腹一杯ありつける。残った料理は参加者に土産として手渡される。参加者がテーブルにつくとき、土産の料理をつめるビニール袋と、もち帰るときそれが外から見えないようにするための靴をすでに持参している。忘れても主催者がビニール袋くらいはくれる。宴会の料理がなくなつてしまし、参加者が手ぶらで帰る羽目でもなろうものなら、「あそここのうちの料理は大したことなかった」と噂されるので、主催者は親戚や海外の家族に送金を頼んだり、あるいは銀行に借金をしてまで祝宴を成功させることに必死である。

食べたら寝る

満腹になつて次にすることは、ただひとつ。眠ることである。「「ちよつとさま」の返事は、「寝る」ことである。



日曜日の教会関係のもち回りの祝宴の料理

なさい(アルモ)や「横になりなさい(トコト)」である。休むことも立派な生活習慣なのである。このため、催し物や行事で食べ物が用意されている場合、プロクラムの最後は必ず食べる時間にあてられ、そのあとは帰宅して休む。

最近、日本では若い女性を中心に羊肉に含まれるラルニチン・ダイエットが流行している。羊肉に含まれる成分ラルニチンは、体脂肪燃焼に不可欠であるといわれ、多くのダイエット・サプリメントにラルニチンが配合されている。したがって日本では、羊肉に「脂を食べても体内には残らない」「肉を食べると疲れがとれる」という歌い文句が並ぶ。このブームのおかげでニュージーランドの対日本向け羊肉の輸出量は前年の二倍近くに上つたとか。同じニュージーランド産の羊肉が、いまやトンガの日曜のウム料理と宴会料理の食材には欠かせない。ダイエットのために羊肉を食べる日本人。一方、羊肉ゆえにダイエットが社会問題となつているトンガ人。両者はあまりに対照的である。



家族の葬儀を終えて、ウム料理を食べ終えて、参加者が解散した後、墓のそばで横になつてくつろぐ家族



共同作業(ゴザ編み)で参加者に出された食事。主食のフレッドフルーツの右の上のおかずがコーンビーフ、左上にシビ入り野菜炒め

羊肉でやせられるの?



森本 利恵

(もりもと りえ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

編集後記

9月から始まる「インド サリーの世界」は、民博では2度目のインド展です。最初の「大インド展」が催されたのは、平成3年のことですから、早いもので14年になります。初めて催されたインド展は、「インドー世界の神と人」を扱ったもので、精神世界を形で表わすところなになるのかと感心したものです。普段着るサリーも神像に着せることがあるそうですから、インドという国は、神が日常的に存在している国なのかもしれません。最近のIT産業の発展も、きっと物質よりも精神を大切にす心の国であるからではないかと自分なりに解釈して納得しています。

もう何年も前のことですが、インドに何度も行ったことがある友人は、インドを出る時には、もう2度と来るものかと思うのだが、しばらくするとまたインドに行きたくなると言っていました。文化のあまりの違いや格差の大きさがそう思わせるのでしょうか、何か不思議な魅力がある国みたいです。メキシコもそんな国でしたが、いまや日本とあまりかわらない国になってしまい、もう来るかとは思わなくなりました。インドはまだそうでもないようですが、どこにでもあるような国になるのも近いのでしょうか。

多様性に富んで、なかなか理解しがたい国が、サリーを通して、少しでもわかるようになればと、特集を組みました。あわせて特別展を見にぜひともお越し下さい。

(八杉佳穂)